

平成30年度後期学校関係者評価書

南アルプス市立八田中学校

<学校関係者評価委員>

室田 直樹 (学識経験者、元小学校長)

清水 秀幸 (学識経験者、元中学校長)

穴水 健二 (平成30年度八田小学校PTA会長)

加藤麻奈美 (平成30年度八田小学校PTA副会長)

濱田あゆみ (平成30年度八田小学校PTA副会長)

今牧 泰良 (平成30年度八田中学校PTA会長)

吉田 幸司 (平成30年度八田中学校PTA副会長)

小沢美奈子 (平成30年度八田中学校PTA副会長)

1 質疑応答・意見交換

(1) 小中一貫について

○昨年末の新聞紙上に「小中一貫校」と位置付けるという記事を目にし、小学校と中学校で統一した教育目標の下での児童生徒の指導をするという、今後の小中学校での目に見えてかわることはあるか、という質問が出された。

- ・小中一貫校としての名前が「南アルプス市立小中一貫校八田小中学校」として、2019(平成31)年4月1日から施行となる予定である。なお、通常は今まで通り「南アルプス市立八田小学校」「南アルプス市立八田中学校」である。
- ・年度末に中学校から小学校へ出向いて、児童に授業(2教科)を行っている機会が多くなることにより、保護者や地域にこのことを「見える化」し、小中一貫校での取り組みが進んでいくと、教育活動がだんだんわかってくると思われる。
- ・八田小中は校舎が離れているなかで、中学校の英語教員が小学校に出向いて授業を行っている。このような取組が、複数の教科に拡大されることによって、小中一貫校の取組が保護者や地域に、少しずつ浸透して行けると思う。
- ・ランドデザインがつくられることで、理解されていくのではないかと。
- ・小中一貫校にかかわるランドデザイン(案)は出来ているが、次年度(2019)の中で、確定して行く予定である。
- ・現在も行っていることだが、今後さらに、中学校の教員が小学校の学習内容を知ったり、小学校の教員が中学校の学習内容を知ったりという、児童生徒への教育指導を小中の教員と一緒に考え、教育活動を実行することをより進める。また、小中合同の校内研究も、現在年2回行っていることも含め、日頃の職員間のさらなる交流を深めながら、協力して教育活動を推し進めていくことになる。

○今までやってきたことと何ら変わりがなければ、小中一貫校を打ち出した意味がない、という意見が出された。

- ・今年度より八田小学校が南アルプス市教育委員会より「学びの質を高める授業づくり推進事業」一年目の指定研究を受けている。その指定研究を2019(平成31)年度は中学校でも受け、小中で取り組むことにより、小学校から中学校へと研究が引き継がれる。

このことも小中一貫校の取組につながる。この取組により、保護者・地域への小中一貫校の様子が、「見える化」出来ると思われる。

- ・これから徐々に小中一貫校にかかわる分離型での教育が推し進められていくので、長い目で見ていただき、ぜひ4年後に期待してほしい、とのことだった。

(2) 教職員の多忙化について

○教員の多忙化が、社会的に問題視されている。小中一貫校にかかわる教育活動に取り組むことでさらに多忙化に拍車がかかるのではないかと、今以上の多忙化をどのように解消していくのか、との質問が出された。また、部活動についても、外部コーチが活用されている部はほんの一部であり、教員の多忙化解消となっていないのでは、との質問が出された。

- ・小中一貫校については、保護者・地域には勿論のこと小中に勤務する職員にも具体的な教育活動等において、まだ見えない部分もあるが、さらに多忙となることが予想される。しかし、多忙化だけに視点をあてるとしたら、事は進まない。小中が密なる連携と協力して取り組みの前進を図る話し合い、その中で必要なこと持続可能なことを創出していく必要がある。その先に、多忙化解消の道筋が見えてくると考える。
- ・部活動については、外部コーチのみに部を任せるわけにはいかず、常に顧問は付き添うので、時間的な解消がなされているわけではない。ただ、技術的な指導の負担は外部コーチにより軽減されるので、できるだけ多くの外部講師を取り入れていきたい、との考えである。
- ・また、外部からより多くの講師を招聘し、様々な方面からの講演をいただくことでも教員の負担軽減に努めたい、と考えている。

(3) 家庭学習について

○肯定的評価が低い項目に「家庭学習」があるが、どのようにすればいいか、という質問が出された。

- ・八田中では、授業の始めに「めあて」を、授業の終わりに「ふりかえり」を取り入れようと考えている。やはり授業が大切で、授業をきちんと行う不断の教員の姿勢により、「家庭学習」へとつながっていくと考える。
- ・また、八田中では、今まで「自主学习ノート」と表現していたものを、「家庭学習ノート」とネーミングを替え、そのことで「家庭学習」をより意識させようと考えている。
- ・小学校では、授業と関連して「家庭学習」に取り組めるよう指導をしているが、なかなか意図したように導くことは難しいようだ。低学年は褒めることの効果が大きいというご意見もあったので、もっと意識して心がけていきたい。

(4) 不登校へのかかわりについて

○多忙化にもかかわることだが、教員数を増やすことで、不登校の生徒へのかかわりを多くすることができる。そのような方向に進められないか、という考えが出された。

- ・まず、不登校といっても単純に一括りにはできない。思い悩んでひきこもる子もいれ

ば、友達と遊んでいる子もいる。様々な家庭環境がある中で、学校は一人ひとりに対応していかななくてはならない。何を背負っているのかを、一人ひとり吸い上げることが必要であり、また、心のケアをする専門の方なども必要となる。そのためにも教員の数を多くしたいが、予算の面から難しい状況がある。そのような声を、多くの保護者があげることで、だんだんと変わってくる、とのことだった。

(5) 八田小中の学力レベルについて

- 「学校の授業はわかりますか」という児童生徒アンケートがあったが、実際に八田小中のレベルはどのようになっているか、という質問が出された。
- ・八田小は、個人差もあるが、国や県の学力調査の結果から課題が多いことが伺える、サポートできる人員がほしい、とのことだった。
- ・担任によって違いがあることを親は心配するという指摘もいただいた。共通理解および確認のもと進めてきているが、これからも足並みをそろえ対応していきたい。
- ・八田中は、学年によっては厳しい状況にある。しかしながら、「学力」というのは、決められたペーパーの中でどのくらい書けるかでなく、考えることができるかどうか、だと考える。生徒が自発的に学習に取り組めるように教師がもっていけるかどうかの方が大切である、今の中学2年生は小学校からの取組の成果がでてきている、とのことだった。